## きせき

著者 川合 仁美 (心理カウンセリング想月カウンセラ)

## もくじ

第1章 出会い

第2章 はじまり

第3章 はじめての戦い

第4章 道のり

第5章 がけっぷち

第6章 変化

第7章 お母さんの気持ち

第8章 お父さんの怒り

第9章 ひとつめの奇跡

第10章 2つめの奇跡

第11章 別れなんてない

## 第1章 出会い

のぼるは小学校5年生。のぼるは小柄な男の子。でも、実は、のぼるは、いじめっ子だ。 いつものぼるは、何かにイライラしていた。早く給食を運んでくれないクラスの子。何を言って も、下を向いているクラスの子。そんなクラスの子をかばう先生たち。いつもぺこぺこしている お父さんとお母さん。でも家では、お父さんもお母さんもケンカばかりしているじゃないか。

何が悪いんだ?僕は自分の好きなことをして、キライなことをしたくないだけなんだ。僕のこと、だれがわかってくれているんだ?だれも僕のことをかばってくれない。だれも僕のことを見てくれていない。だれも僕のことを認めてくれていない。

いつも、のぼるはそう思っていた。のぼるはまわりのことも、自分のことも大キライなのだ。

ある日、いつものように、給食袋を振り回しながら、家に帰っていた。今日も、学校はつまらなかった。授業はちんぷんかんぷんで、先生が言っていることはよくわからないし、みんなのようにうまく板書もできない。そもそも、のぼるは漢字をうまく書けなかった。マスからとびでてしまう。何回もたくさん書かされることは苦痛でしかなかった。だから、授業中は、えんぴつの芯で机をガリガリさせることに熱中したり、ノートに落書きして、ヒマな時間を過ごしていた。そんなのぼるを、まわりのみんなも、大人たちも、ただ「やる気のない」子だと思っていた。

そんなつまらなさを給食袋を振り回すことで、解消されている感じがいつもしていた。その独特の重みが、のぼるの手と腕にかかり、そして振り回している力が、自分のつまらなさをまわりにまきちらしている感じがしたのだ。

まわりも、僕と同じようにつまらなくなればいい。

のぼるが家に帰るには、いつも神社を通らなければならなかった。通学路に神社があるのだ。 のぼるは、この神社がおそろしかった。いつものぼるは人をいじめている。物をこわしている。 その「悪」は、のぼるにもわかっていた。でも、どうしてもやってしまうのだ。だから、この神 社を通るたびに、なにか天罰がやってくる感じがしたのだ。

その日は、とくにつまらない日で、いつもは神社では振り回さない給食袋を、知らないうちに 振り回し続けていた。振り回していることを、のぼるは気が付いていなかった。

「あっ」

気が付いたら、給食袋で、神社のとうろうをぶつけていた。 また、やってしまった。また、みんなに怒られる。みんなにばれる前に逃げてしまおう。

そう思った瞬間だった。 そう、あの「人」と出会ったのは。

「う~ん」

女性の声がした。

この「人」はどこから来たんだろう?さっきまで、だれもいなかったはずなのに。 その「人」は、とても不思議だった。もちろん、顔も、体も、うでも、そして足もついていた。 でも、そのまわりには、不思議な光に包まれていた。その光の色は、何色とも言えない、でも今 まで見たことのないきれいな色をしていた。まるで、世界中にあるきれいな色をかき集めてきて、 そしてそれをきれいに混ぜたようだった。

のぼるは、自分でも知らないうちに、じっと、その「人」の顔を見ていたようだった。

のぼるは、その「人」を見ていて、あることを思い出していた。

のぼるは、幼いころから、なんとなく直感が強い子だった。たとえば、幼稚園のまなみちゃん の手が少し黒く見えていたときがあった。これから、けがをするのかな、となんとなく、でもき っとそうなるだろうと、確信をもって思っていた。すると、次の日に、まなみちゃんの手には、 包帯が巻かれていた。階段から落ちて、手をけがしたのだと、言う。

またある時は、小学校の担任の先生、女性で28歳(この歳は、クラスメイトが先生に直接聞いて、わかったのだけれど)のおなかのまわりだけ、なんだかぼんやり光っているときがあった。 その数日後に、担任の先生にあたらしい赤ちゃんができたことを知った。まだ、おなかはふくらむ前だったけれど、休養で先生が少しお休みをしたので、わかったのだ。

またある時は、お母さんと一緒にいたときに、どうしても寒気がした。それは一日だけだったけれど、お母さんが部屋に入ってくるたびに、お母さんと話をするたびに、背中のほうが「ぞくっと」したのだ。でも、のぼるには、それがこわいわけではなかった。ただ、ぞくっとした感覚が背中にあるだけだった。その一日は、お母さんのまわりで、よく「ぱっ」と光が見えた。それは、かみなりのようにも見えたし、ただ、部屋の電気がちかちかしているだけにも見えた。

そう、幼いころから、そんなことがよくあった。

あまりによくあるから、のぼるには、それが普通だと思っていた。 みんなも同じように見えていて、同じような感覚があるのだと思っていた。

去年の冬、雪合戦をしていたときのことだ。友だちのいないのぼるは、雪合戦であそんでいた。 というよりも、通りかかったクラスメイトに、雪をぶつけていたのだ。クラスメイトにあてては、 とつぜんやってきた雪玉にびっくりしたその子の表情を見て、楽しんでいたのだ。

ははは。ざまー、みろ。

そこに、クラスメイトの一人の、かけるがやって来た。かけるは、名前どおり、走るのが速い。 その速さを生かして、サッカーをやっているらしい。小学校では、走るのが速いことは、とても 尊敬される。だから、クラスでも、人気ものだった。しかも、かけるは、そのことを自慢したり、 足の遅い子をバカにしたりしなかった。でも、のぼるには、とても苦手な存在だった。得意なこ とがあっても、それを自慢しないかけるは、苦手なことが多すぎるぐらいあるのぼるには、近寄 りがたかった。だから、かけるには、ちょっかいをだしたことがなかった。

しかし、その日のかけるは、少し様子がおかしかった。いつもなら、友だちにかこまれて、楽 しそうに話をしているかけるだが、今日は一人だ。

かけるのまわりには、グレーのような空気がただよっている。いつもは、そんな空気は見えない。

どうしたんだろう。あのグレーの空気は、あんまりいい調子ではないことを示していることを、 なんとなく、のぼるはわかっていた。でも、のぼるには、話しかける勇気もない。そもそも、か けるとはあまり話をしたこともない。

のぼるは、自分の手の中にあった雪玉を、そのまま地面に落とした。

「だれだ?」

その落とした雪玉の音で、かけるは、のぼるに気がついた。

「なんだ、のぼるか。何してるんだ?こんなところで」

不思議そうな顔で、かけるは、のぼるを見ている。

「あ、いや…」

なんと答えていいかわからない。当たり前だ。雪玉を人にあてて楽しんでいた、とは言えない。 というよりも、やってはいけないことぐらい、のぼるにもわかっていたので、言えないのだ。 「また、みんなをいじめていたのか?」

うっ。かけるは、わかっていた。

気まずい空気が流れる。

「それよりも、どうしたんだよ?おまえのまわりに、グレーの空気がただよっているぞ」 のぼるは、自分の話題からはずれたくて、そう言った。

「どういう意味だ?グレーの空気ってなんだよ?」

「だから、ときどき、あるだろ?人のまわりにある空気の色だよ」

「なんのことを言っているんだ?」

だんだん、かけるの表情がくもってくる。それを見て、のぼるは、違和感を感じ始めていた。 なんで、話が通じないんだ?

「だ・か・ら・、ときどき、人のまわりに、色が見えるだろ?赤とか、黄色とか、青とか、緑とか、グレーとか!」

「のぼる、大丈夫か?目になにか病気でもあるんじゃないのか?」

すたすたと、かけるは、少し逃げるようにして、行ってしまった。

なんで、かけるは、わからなかったんだろう?もしかしたら、あの色が見えるのは、ぼくだけなんだろうか?

もやもやした気持ちで、家に帰った。

家に着くと、めったに家にいないお母さんが家にいた。

あれっ?今日は仕事、もう終わったのかな?少しウキウキした気持ちで、おやつを食べていた。 おやつは、家にあるものを、いつものぼるが適当に選んで食べている。

「じゃ、のぼる、お母さん、また仕事に行かなきゃいけないから。ごはんは、電子レンジの中の ものを温めて食べてね」

忙しそうに、行ってしまった。

なんだ。お母さん、仕事が終わったんじゃなかったんだ。本当は、のぼるは、あの空気の色の ことをお母さんに聞きたかった。お母さんならきっと見えているはず、きっと、ぼくと同じもの が見えているはず、と思いたかった。

のぼるはいつものように、ゲームをし始めた。でも、かけるとの話が頭から離れない。なんで、 あの時、かけるはあんな表情をしたんだろう?

そうだ。

のぼるは、コンピューターを開いた。家では、ゲームばかりしているのぼるは、コンピュータ

一の操作も苦もなくできた。インターネットで調べてみればいいんだ。

「空気色」で検索してみる。

だめだ。空気の色として検索してしまう。

「空気色見える」う~ん。だめだ。やっぱり、同じだ。

「人 色 見える」で検索してみた。「オーラ」という聞きなれない言葉がでてきた。のぼるは、 漢字が苦手だったので、あまり、説明を読んでもよくわからなかった。でも、わかったことは、 それが見える人があまりいない、ということだった。

ということは、ぼくが見えているこの色は、きっと目のさっかくだったんだ。見まちがいだっ たんだ。

のぼるは、その日以来、そう自分に言い聞かせてきた。

だから、この「人」が現れるまで、自分に人とはちがうものが見えることすら、のぼるは忘れかけていたのだ。自分に言い聞かせていたので、だんだん、その空気はあまり見えなくなっていって、そして、今では、まったく見えなくなっていた。

とうろうで出会った「人」のいろんな色を見ているうちに、そんなことがありありと鮮明に思い出されてきた。それとともに、かけるが変な顔で見てきたことも、そのときにあった不安な気持ちもよみがえってきた。

「それは、残念なことだね。」

え?何が?

「だから、のぼるくんが、自分の見ているものをうたがったことよ。」

あれ?ぼくは、自分の考えていることを口にだしているんだろうか?

「ううん、してないよ。でも、わたしには、のぼるくんの考えていることが、聞こえてくるの。」 は?どういうこと?

「わたしが、のぼるくんの考えていることに周波数をあわせているんだよ。」

のぼるには、周波数という言葉自体知らなかったし、とにかく、自分の考えを読まれていることが、とてもおそろしかった。

「ごめん、突然、考えを読まれていたら、こわいよね。でも、大丈夫。のぼるくんが、こうやって、わたしが見えていることに、意味があるのだから。」



にげよう。そう思った。あまりにこわすぎる。

「待って。わたしは、のぼるくんに危害をあたえようと思っていないよ。その逆なの。わたしは、のぼるくんをみちびきたいと思っているの。」

突然、のぼるには、その人のすがたがはっきり見えた。今まで、光に気をとられていて、その「人」のすがたまで注意をはらっていなかったのだ。

その「人」は、やさしくほほえんでいた。その「人」は女性だった。たぶん、お母さんと同じ年ぐらいか、少し若いぐらいだ。そして、きれいな洋服を着ていた。その服は、どこかの民族衣装にも見えた。色は白っぽくて、頭からベールのようなものをかぶっていた。長いきれいな黒い髪をしていた。そして、目は緑色だった。その緑色の目を見ていると、とてもあたたかい気持ちになってきた。彼女のやさしさが、その目から伝わってくる。まるで、小川のせせらぎのように。

「やっと、見えたみたいね。よかった。」

今まで、のぼるがちゃんと見ていなかったことも、その「人」にはわかるようだった。

「わたしは、この神社のとうろうにいたの。のぼるくんが給食袋をふりまわしていたのも見ていたわ。そして、今日、とうろうにぶつかったことも。でもそのおかげで、こうやって、のぼるくんの前にいて、こうやって、お話しすることができた。」

え?え?え?

のぼるのあたまの中には、「?」しかない。何を言っているんだろう?まったく、意味がわからない。

でも、その「人」のやさしさは伝わってきている。だから、のぼるには、わかっていた。彼女が言っていることは、真実であって、うそいつわりがないことも。

「そう、わたしが言っていることは、きっと、のぼるくんには理解するのに時間がかかると思う。それでもいいの。でも、心はオープンにしておいて。」

こころをおーぷんにする?どういうことだろう?

「わたしが言っていることを、うそだ、とか、ぼくをだましているんだ?とか、そんな考えにしばられないことよ。わたしが言っていることが、100パーセントわからなかったとしても、それでもいいの。ただ、そんなこともあるんだ、と受けとめられるように、聞いてほしいの。たとえば、かけるくんに、のぼるくんの言っていることを、「何を言っているんだ?」とはねのけられたでしょう?」

なんで、そんなことまで知っているんだ?

「ふふ、のぼるくんが見てきたもの、聞いてきたもの、感じてきたもの、すべて経験してきたこと、知っているのよ。」

どうやって?

「だんだん、わかってくるわ。

かけるくんの話にもどるけれど、かけるくんが、のぼるくんの言っていることを全く信じなく て、行ってしまったとき、どんな気持ちがした?」

いやだった。

「そう、いやだったよね。もっと、言うと、不安になったのではないかな?」 なんで、わかるの?

「いいの。不安になっていいのよ。自分の言っていることを、まわりが信じてくれないと、不安になるのは、自然なことなの。そして、のぼるくんは、そのあと、何をしたのか覚えている?」もちろんだ。たとえ、1年前に起きたことでも覚えているぞ。空気のことは、見まちがいだ、と言い聞かせてきたんだ。

「そうね。そして、実際に、その空気は見えなくなっていった。他の人が見えていないから。で も、それは、のぼるくんにあった能力を否定してしまったことになるの。そして、その能力がな くなったことで、のぼるくんの世界はせまくなったの。」

たしかに、空気が見えなくなってから、のぼるは、実際に困ることもふえ、そして、ひとりぼっちの感じがどんどん強くなっていった。

「それは、孤独感ね。まわりに人がいても、いなくても、自分で自分を否定してしまうと、どん どんひとりぼっちになっていくのよ。孤独を感じるの。否定というのは、こんな自分はダメだ、 とか、こんなこと思ってはいけない、とか、こんな感情をもってはいけない、とか、そして自分 なんていないほうがいいんだ、とか、自分で、自分のことをNOと言うこと。」

そうか。この1年、とてもくるしかった。なんだか、だれもぼくのことを見てくれていない感じが強く強くあった。それは、まわりがわるいんだ、と思っていた。

「ちがうのよ。きびしいかもしれないけれど、のぼるくんは、自分で自分を見てあげていなかったの。だから、まわりも自分のことを見てくれていない感じがしたのね。そうやって、自分の世界がちいさくなっていったのよ。

あなたの、その空気が見えることは、能力なのよ。もっと自信をもっていいの。きっと、その 能力は、のぼるくんの力になっていくから。」

たしかに、あの空気が見えることで、のぼるは助けれられることも多かったのだ。それは、の ぼるに「ヒント」を与えていた。

たとえば、お母さんがつかれていたとき、お母さんの頭のまわりには、グレーの空気がただよっていた。その空気を見て、もう少しお母さんは、眠ったほうがいいのではと思って、洗濯物を

とりこんだり、食器を洗ったりした。今までそんなこと、自分からしたこともない。お母さんは、おどろいた顔をしていたけれど、とてもうれしそうだった。そして、1時間ぐらい昼寝をしに行った。起きたときには、そのグレーの空気はなくなっていた。すっきりした顔をしていたお母さんがいた。

「そう、あのとき、お母さんは休養が必要だったの。もし、あのお昼寝がなかったら、お母さんは、頭痛がして、そして、1週間ぐらい寝込んでいたのよ。他の人は気づかなかったでしょう?」 そういえば、あのとき、お父さんは、お母さんのつかれに気が付いていなかったようだった。お母さんは、そういうことをかくすのだ。ガマンしてしまうのだ。

「さあ、話はこれぐらいにして、さっそく、旅にでてみましょう。」 旅?ぼく、学校へ行かなくてもいいんだ!と思ったら、わくわくしてきた。 その「人」は少し笑った。

「ごめんなさい。のぼるくんは学校があまり好きではなかったわね。旅に出る、というのは、どこかへ出かけるという意味ではないの。のぼるくんの「こころの」旅にでるのよ。」

また、変なことを言っている。よく意味がわからない。

「さっきも伝えたとおり、今はまだ意味があまりわかならくてもいいのよ。ただ、これから、の ぼるくんが学校へ行ったり、おうちにいるとき、いつでもわたしがそばにいるわ。そして、一緒 に旅にでてみましょう。」

やっぱり、「旅」の意味はよくわからなかったけれど、でも、これから一緒にいてくれるのは、とてもこころ強かった。

「あ、そうそう。わたしの名前は、ミシャよ。」

「よろしく、ミシャ。」はじめて、のぼるは、声を口に出して言った。

ミシャは、そんなのぼるを見て、やさしくほほえむ。